

古代寺院普賢寺の建物・基壇跡について —2006年度測量調査中間報告—

若林邦彦

はじめに

京田辺市南部、同志社大学京田辺キャンパスが所在する丘陵の南側には普賢寺川が流れ、それに沿って東西にのびる小さな平野は普賢寺谷と呼ばれている。川の北側の京田辺市普賢寺下大門には大御堂観音寺が所在する（図1）が、そこには天平期に製作された木芯乾漆十一面観音立像が安置され、国宝に指定されている。本寺院は古代・中世には普賢寺と呼ばれており、それが周辺部に地名として残存している。

『興福寺官務牒疏』には、普賢寺が天平十六年に良弁僧正によって再興され、さらに普賢寺境内の親山寺は白鳳期（7世紀後半）に「筒城寺」として建てられていたという記述がみえる。『興福寺官務牒疏』の記述の真偽については検討の余地があるが、実際に天平期と考えられる十一面観音立像が残存していることから、普賢寺が奈良時代以前に建立されていることは確かであろう。また、井上一稔氏（井上2005）らの研究によると、この十一面観音立像は桜井市の聖林寺のものと酷似しており、製作者やその年代に関して二者の関連が強いことが指摘されている。さらに、筒城寺・普賢寺のある綴喜郡は古代氏族息長氏の拠点と考えられている。『興福寺官務牒疏』の記述をふまえた上で、井上氏は天平期に息長氏による筒城寺の再興が推進されて、十一面観音立像が製作・安置された普賢寺が建立されたという推測を行っている。

この普賢寺寺域内と考えられる現在の観音寺本堂背後の丘陵上には、多数の7世紀・8世紀の瓦が散布することが知られている。このうち、約60年前に現地で収集されたその古代瓦の一部が星野猷二氏（星野2004）によって報告されている。報文中で示されているのは1枚の白鳳期軒丸瓦と数点の奈良時代の軒丸・軒平瓦である。星野氏は、奈良時代の軒丸瓦の1点については、大宰府出土瓦と同范品として注目している。

また、古くから注目されていたこの瓦散布地には、普賢寺跡と思われる遺構が残存している。瓦の散布する高まりの上に塔心礎と考えられる礎石が現存していて、1930年代にも写真を沿えて報告（京都府編1930）されており、高まりは古代普賢寺の塔基壇だと指摘されている。周囲におびただしい数の平瓦が散布することから、瓦積み基壇だった可能性もある。近年発表された網伸也氏の論考（網2005）でも、その可能性ありと指摘されながらも、詳細な記録が存在しないために古代瓦積み基壇の集成表には明記されない状態となっている。

このように、普賢寺については、古代仏教美術史上注目され、なおかつ創建期の遺構の残存の可能性のある古代寺院であるにもかかわらず、一部の採集瓦のデータしか公表されていない状態である。

古代寺院遺構の現状について何らかの記録を残し、研究や遺跡保存の基盤を作る必要性はきわめて高いと考えられる。

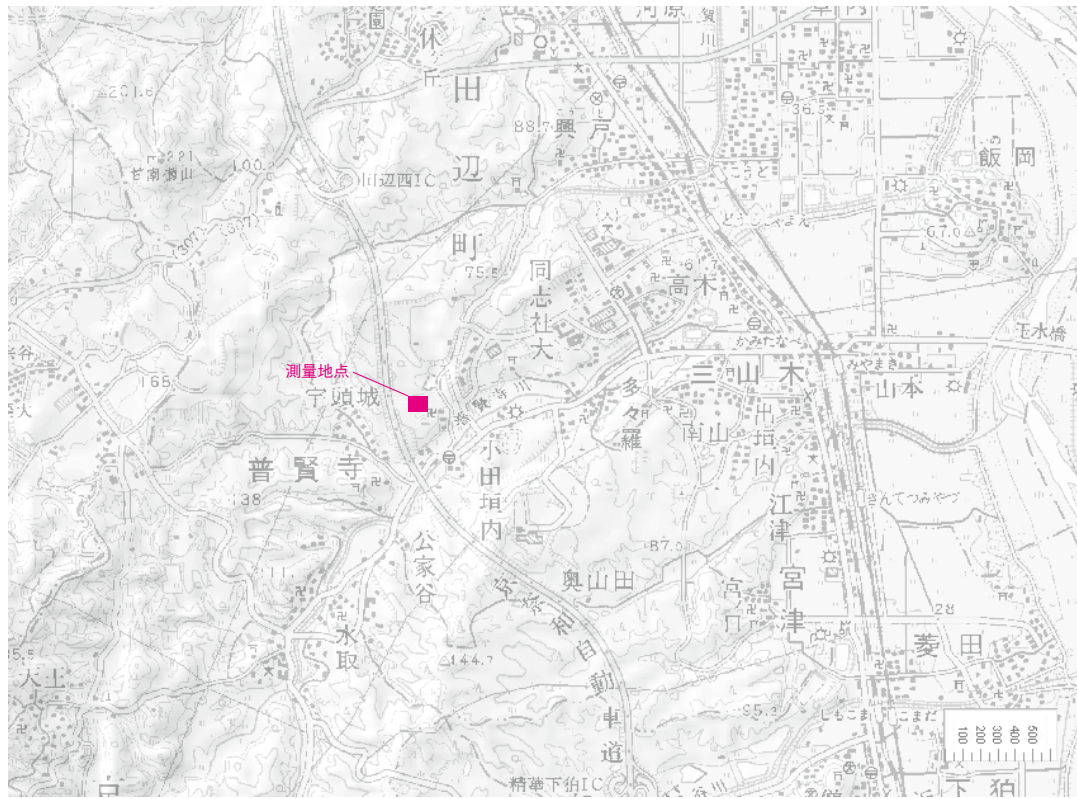


図1 調査地の位置

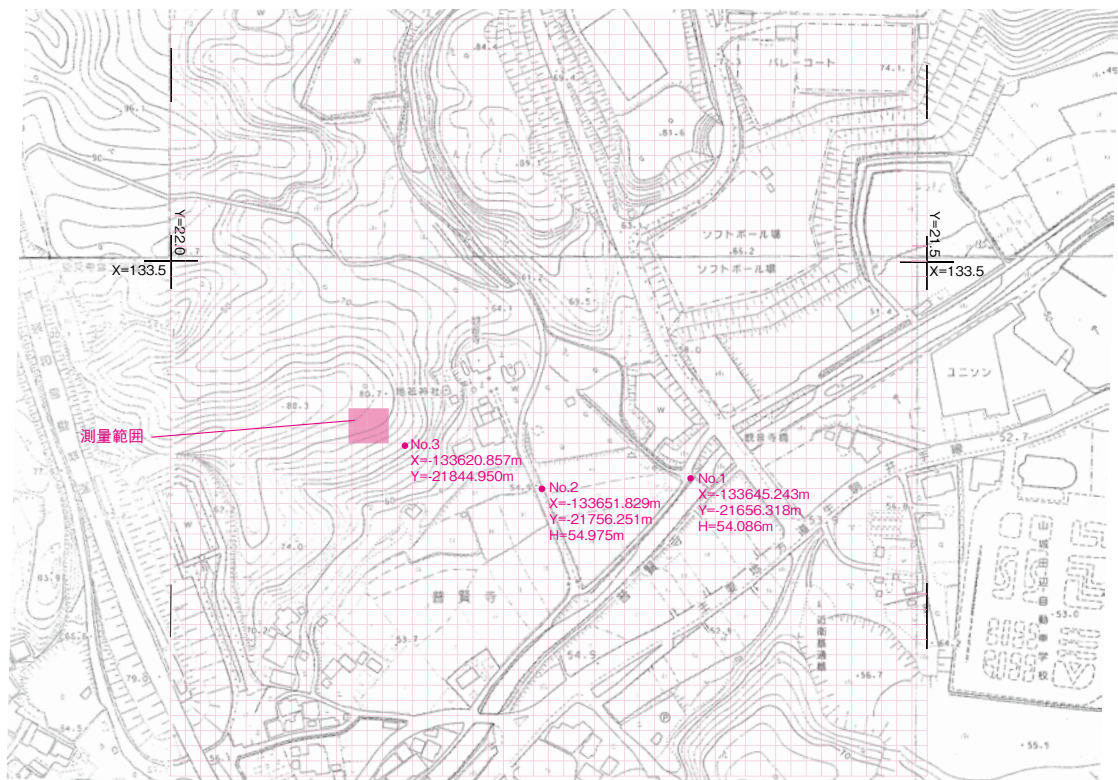


図2 測量地点の位置と基準点

現在、同志社大学歴史資料館では、南山城総合学術調査として、古代寺院のデータ集成作業に取り組んでいる。この研究の一環として2006年度には、同館では普賢寺跡の測量調査を行った。現地環境に配慮して本格的な伐採を経ない上での測量調査であるため、小規模な範囲しか対象とできなかったが、一定の成果を得ることができた。本稿では、その成果の速報をともに今後の課題について述べたい。

測量調査の方法と成果

今回の調査では、測量範囲近くにGPS測量にもとづく国土座標系に準拠した座標値をもつ基準点を設置し、そこからトータルステーションを用いて等高線測量作業を行った。この方法は、基壇跡の形状を、国土座標系を基盤としたデジタルデータとして等高線地図を作成・利用することを目的としている。このため、測量で用いた水準高も、公共測量水準点からの観測値ではなく、GPS測量に基づく数値となっている。

基準点のGPS衛星電波観測とデータ解析作業そのものは、本学文化情報学部専任講師津村宏臣氏に依頼して行った。図2に示すように、測量調査を試みた地点は、現在の大御堂観音寺本堂北西の丘陵上である。この地点には、立木が覆い茂り、直接GPS衛星観測を行うことが難しかった。そのため、現在の観音寺の周囲の路上に2点（図2のNo.1・2）の基準点を設けて衛星観測して座標値を得て、その2点間からの観測をもとに丘陵上に基準点を設けることとした。結果として、この2点の水準高は、京田辺市作成1/3000地形図にみえる直近の観測地点の標高値とほとんどかわりなく、GPS測量による標高値と公共測量水準からの観測値のずれが僅少で問題が少ないことが判明した。

No.1・2からトータルステーションによる観測を行って、基壇跡近くにNo.3基準点を設定して測量作業を行った成果が、図3である。この結果、塔心礎周囲の建物・基壇跡の標高は、先述の京田辺市作成1/3000地形図にくらべ2m以上高いことが判明した。これは、京田辺市作成地形図が航空写真測量にもとづくために、丘陵上の森林部に関しては正確な地表の標高値を得にくかったためと考えられる。今回の測量により、森林部についてより厳密な標高値や詳細な地形観測結果がえられた。

図3の測量対象部の中心は東方向に張り出した尾根の平坦面であるが、塔心礎の南北約12～14m東西約20mの範囲が、0.4～0.8m程度隆起していることがわかる。隆起の南部と西部は急な崖面になっているが北部は平坦地、西部は細い尾根へとつながっている。南部・東部に関しては、古代の地形からさらに浸食・崩落が進んでいるかもしれない。いずれにしても、この隆起部が基壇もしくは建物痕跡の可能性が高い。

現状では、隆起辺縁に現状で瓦片が分布していることがわかる。特に隆起北東部には広い範囲に多量の瓦片が散布している。このことから隆起部を基壇もしくは建物痕跡と考えることができる。辺縁に散布する瓦は基壇側縁部に位置したものが崩壊した痕跡と考えることができる。一方では建物に葺かれていた屋根瓦群が崩壊した痕跡の可能性も考慮しなければならない。現状では、この隆起部を瓦積み基壇痕跡と考えるか、建物倒壊・廃棄痕跡と考えるかについて、即断を下すことはできない。

また、心礎は隆起部の中心から南東にずれた地点に位置していることがわかる。隆起が基壇の形状

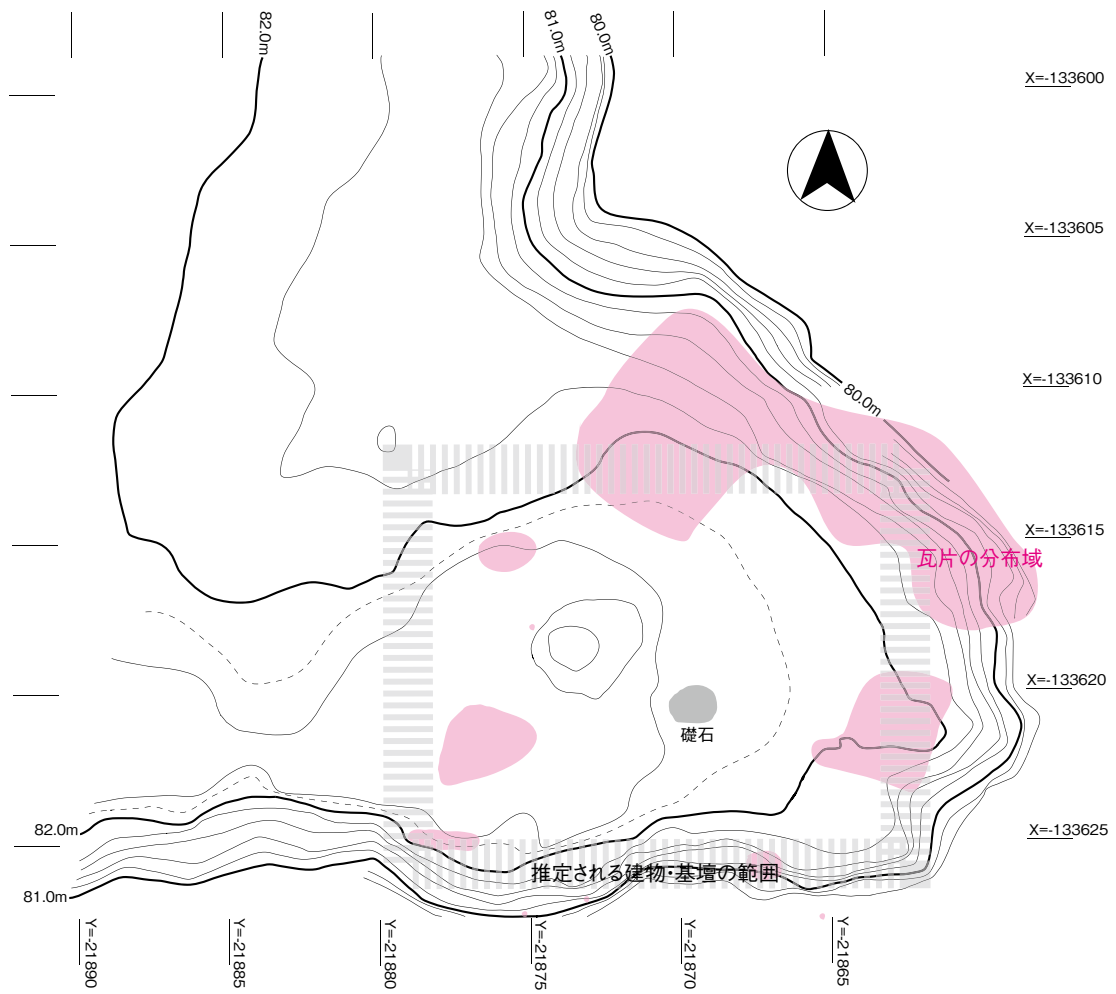


図3 基壇・建物跡の測量図 (1/250)

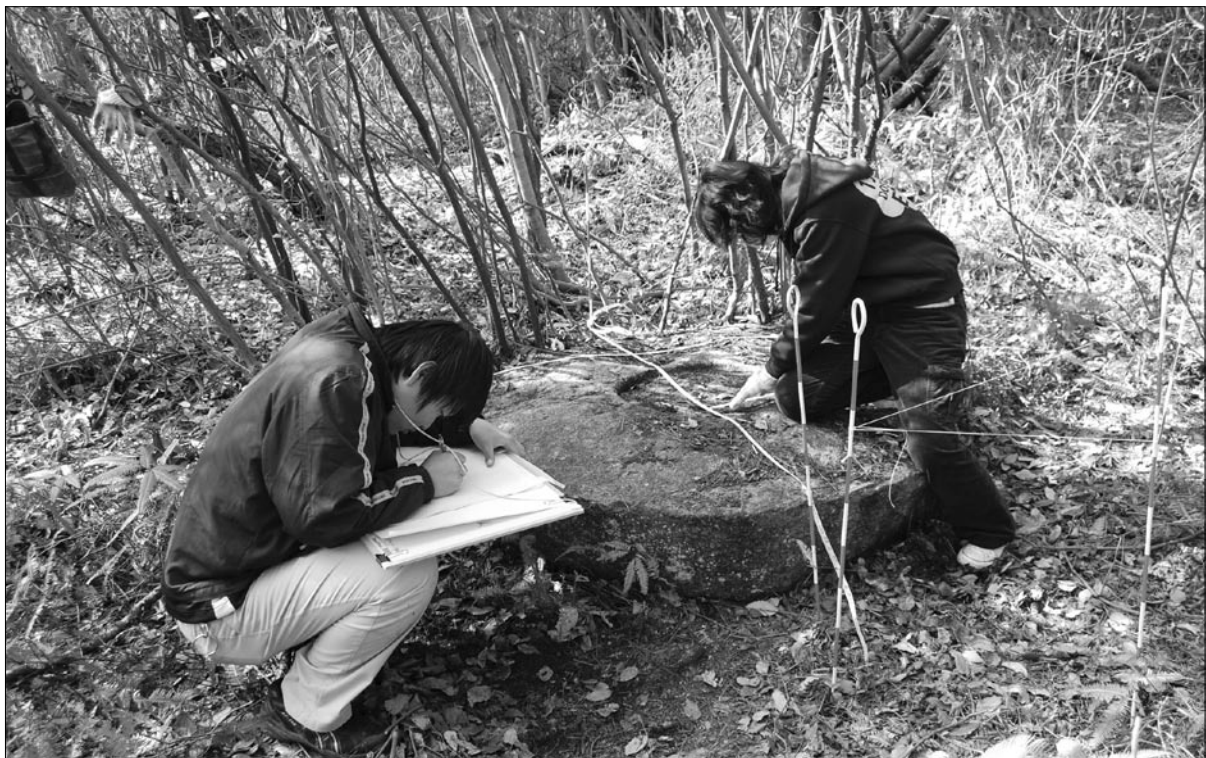


写真 礎石の現況

を一定程度反映しているとしても、心礎がその中心にないことは、礎石自体が原位置から移動している可能性を示唆している。実際に1930年代の状況の報文（京都府編1930）には、礎石が横転して半分埋まっている状態が掲載されている。現状では、写真のように平坦に安置されていて、この70年間にだけでも、なんらかの人為的移動がなされたことがわかる。建物や基壇の中心が、必ずしも心礎の現状位置に一致する必要はないと考えられる。

課題

測量成果によりおぼろげながら認識できた建物もしくは基壇跡は、先述のように1辺十数メートル以下の規模と考えられる。その大きさからは、寺院関係施設としては、塔建物もしくはその基壇に相当すると考えられる。また、その形状からも、概ね東西方向に長軸があるようにみうけられる。普賢寺跡に関しては、これ以外に古代遺構跡と思われるものは現状地形から類推することはできない。また、推定される塔跡が起伏の顕著な丘陵上にあつて、方形の回廊内に講堂・金堂などがともに並ぶ伽藍配置を想定することは難しい立地条件である。このような状態から推定される塔跡については方位の規制なく建てられたと想定していたのだが、測量の結果この建物自体は正方位にのって配置されていた可能性が想定される。ただし、伽藍の有無も含めて、さらに広い範囲での測量もしくは発掘調査などを経ないと詳細は不明である。

また、推定塔跡の所属時期も問題である。星野氏の報告（星野・宇佐2004）では、8世紀以後の瓦が主体をしめ、若干の白鳳期の瓦が含まれるようである。主体となる瓦をもとに年代を推定すると、奈良時代に建立された塔跡とも考えられる。先述の網氏の論考では、瓦積み基壇は百済系の寺院建築技術で、7世紀後半の流入例が多いようである。その後、畿内から在地への広がりの中で8世紀に分布が広がったとされている。測量した遺構が瓦積み基壇であれば、網氏のいう拡散期の所産と考えることができる。発掘調査によって当該遺構の時期を決定することしか、この問題を解決する方法はない。

以上のように、当該遺構については測量調査も完全ではなく、学術情報が不足している状態であることには変わりない。今後、様々な調査を行うことによって、南山城の木津川左岸地域の古代寺院の一角を占める普賢寺の実態が明らかにできるものと思われる。

なお、測量調査作業に参加した有志学生は、以下の通りである。

清水邦彦・宮城一木（同志社大学大学院）

大本朋弥・村井杏侑美・山下奈津美・吉田あゆみ（同志社大学文学部）

参考文献

- 網 伸也 2005「日本における瓦積み基壇の成立と展開 - 畿内を中心として」『日本考古学』20号
井上一稔 2005「京田辺市 観音寺十一面観音像の周辺」『文化学年報』54巻
京都府編 1930『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十一冊
星野猷二・宇佐晋一 2004『器瓦録想』伏見城研究会